自らは、ヒトという名の生物の　いち生命体に過ぎず

先日、アメリカの女優のジェリーナ・ジョリーさんが、将来の遺伝性の乳がんの不安から両乳房予防切除を公表し、がんの不安や恐怖に悩む女性の選択肢が増えることを願って公表したことがマスコミを賑わせていた。

彼女は母親が乳がんで６年前に５９才で死去したこともあり、検査を受けたところ医師から「乳がんは８７％、卵巣がんは５０％と推定される」と説明され、切除手術により「乳がんになる可能性が５％未満にまで低下した」と話したとか。

遺伝性とは、特定の遺伝子の変異のことだと思うが、つまりＤＮＡの配列の特定箇所の変異ということだろうと思う。
人の遺伝情報全体（ヒトゲノム）の解読は２００３年４月に解読完了が宣言された。
ヒトゲノムの暗号文字は４種類の塩基の３０億文字からなる塩基配列（ＤＮＡ）のことである。
人に最も近いチンパンジーのゲノム同士を比べると違いは僅か１．２３％、一人ひとりのゲノムを比べると、約１０００文字に一文字の割合、数百万ヶ所に違いがあるといわれている。

ヒトゲノムの解読により、その特定箇所の変異と病気との関係が次第に明らかになり、ジェリーナ・ジョリーさんのような遺伝性の因子（ヒトゲノムの特定箇所の変異）も明らかになってきたものと思われる。

人の病気の９０％を越える殆どのものが、このヒトゲノムのある特定箇所の変異と関係があるのでないかといわれているだけに、現在の生命科学の急速な進歩で、益々その詳細が明らかになってくると思う。
そういえば以前に、アメリカでは契約前の検査で糖尿病になる因子があると分かると、生命保険契約ができないこともあると耳にしたことがある。

彼女のように今は健康であっても、医療技術の急速な進歩と相まって、先々の病気への不安や恐怖からその予防、治療のために選択肢が増えることは望ましいことであるが、一方、その選択を自らに迫られることであり、自らの生命観、自らの生き方観に否応なく向き合うことを迫られることでもある。

チンパンジーのゲノムとの違いは僅か約１％であることからも理解出来るように、自らのヒトゲノムは生物の進化の延長線上の存在であり、こればかりは自らの意志ではどうしようもなく、自らはヒトという名の生物のいち生命体であることを、今一度しっかりと認識しておく必要があるように思う。

阿部幸泰　　（2013 年 5 月 23 日　記）